

書 評

漆原和子編著『石垣が語る風土と文化―屋敷囲いとしての石垣―』古今書院、2008年発行、A5版、257頁、3600円+税。

本書を評する機会を出版社に与えていただいた。そこでまず、学生・院生の皆さんを主対象としてこの原稿を書くことを述べておきたい。地理学を学んでいる学生・院生の皆さんは、漆原和子先生の名前を知っているであろうか？評者が大学院生を相手に講義をしていて、「吉野正敏先生は・・・」と言っても、ほとんどの院生が「誰ですか？その先生」という顔をする。若い学生・院生の皆さんにとっては、もしかすると漆原先生は「知らない先生」なのかもしれない。しかし、地理学を学ぶ学生・院生の皆さんには、ぜひこの際、本書を読んで、漆原和子先生の名前を知っていただきたい。

評者が本書を手にした時にまず驚いたのは、出版に至るまでの編著者の仕事の速さである。編著者があちこちと調査に出かけていたことは知っていたが、あっという間に出版されてしまった。しかも、図が多いのに、これだけ図を多用しているのに出版が速かった理由の一つは、漆原研究室の院生たちが多大の協力を惜しまなかったために違いない。漆原研究室に行けば、いつも漆原先生に協力を惜しまない院生たちの涙ぐましい姿を見ることができる。その中の何人かは、漆原先生と連名で調査結果を投稿論文にしている。教授と院生のすばらしい関係である。

もちろん、本書は、最近の調査結果のみに基づくものではなく、編著者の長年にわたる現地観察の結果に基づいている。評者は、西南日本の景観がどのようなものであるのかは、ほとんど知らない。石垣をもつ屋敷のイメージさえも湧きにくい。

だが、本書のタイトルを見て、すぐに登山道とヒマラヤの景観が目につかんだ。カラコルムやヒマラヤの登山道では、急斜面に登山道を設置するのに人力で石垣をつくって基礎としている。日本の登山道では、土壤侵食を軽減させるために、近

自然河川工法を応用した近自然登山道工法という手法が取り入れられつつあり、そのために登山道で石組みが行われる。また、ヒマラヤのあちこちでは、ヤク、ヤギ、ヒツジ、ノブタから農作物を守るために、畑の周りには石垣がある。本書の内容とは無関係に、「石垣」が勝手にほかの地域の風土や文化に思いを巡らせてくれた。

そろそろ本題に入る方が良いでしょう。本書によれば、石垣は屋敷の景観を構成する要素の一つで、気候と文化の反映である。本書は13章からなる。4名の執筆者による本であり、勝又 浩（第8、12章）、藤塚吉浩（第8、9章）、陳 国彦（第11章）が、それぞれ異なる立場から執筆に加わっている。だが、編著者である漆原和子が、まえがきを除いたすべての章の執筆にかかわっている。本書には民俗学的な視点からの重要性もあるかもしれないが、評者は、本書を地理学そのものの成果として読んだ。しかも、フィールドワークによって、こういった図ができあがり、こういった記載やまとめ方ができる、ということがよく理解できる。だから、地理学を学ぶ学生・院生の皆さんに読んでいただきたいのである。

もう少し詳しく述べてみよう。第1～12章では、石垣の高さ、厚さ、積み方、材料、方向、残存率などを指標にして、小スケールの風土が説明できると述べている。さらにこれらは、各戸の経済力にもよっているという。石垣は、時の経過や経済発展とともに減ってきている。したがって保存・保全の視点が重要となっており、また最近では、自然素材である石垣が見直されているという。なのに、国定公園に指定されている地域では、石材をとることができなくなってしまっていて、ジレンマが存在している。このような、自然資源の利用と保全、文化的価値の保全といった問題に、地理学的アプローチを行っているのである。石工がいなくなると石垣の修復ができなくなる。したがって、石垣は消失していく。いっぽうで石工によらない、村人によってつくられた石垣も存在している。この場合であっても、次世代への技術の伝搬がなければ、石垣の保存・保全

は難しい。もちろん本書では、集落が地形・水にかかわって成立し、そこで防風のための石垣が必要になったという、自然環境要因と石垣との関係についてもきちんと議論が行われている。第13章では、石垣・防風林関係の文献がまとめられている。今後の研究にとって、きわめて重要な章として位置づけられる。

最後に、10ページにわたる詳しい用語解説があって、地理学のバックグラウンドをもたない読者や、逆に民俗学のバックグラウンドをもたない読者への配慮がなされている。しかし、これは言い換えれば、自らが進んで学ぼうという姿勢や喜びを学生・院生の皆さんから奪っているのと同じことではないだろうか。この本に限定されることではないが、一般的に言って、出版社や編著者が、こうした点に配慮をしなければならない昨今の状況はいかがなものかと思う。

石垣の保存・保全という点では、本書に載せられた多数の石垣の分布図が、将来きわめて重要な資料となるだろう。それゆえ、できれば、すべての石垣分布図に、「何年何月時点」と明記して欲しかった。石垣の写真も同様である。

本書は、完成が速かったと述べたが、ふと考えてみれば書評が出るのも速かったように思う。この春に書店に並んで以来、夏までの間に、すでに3誌で本書の書評を読んだ。これらの書評はいずれも素晴らしいが、漆原先生の地理学への情熱や人柄に心を奪われた人が多いのだろう。

(渡辺 悌二)